
IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

剣聖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

【Nコード】

N1932X

【作者名】

剣聖龍

【あらすじ】

サファイアのような瞳を持つ少年、天空寺蒼太。

ガンダムオタクで、インフィニット・ストラトスを知り尽くした彼には極めて希な特異体質が幾つかあった。

ある時、猫を助けた事でトラックに跳ねられ死んでしまうが、助けた猫が神様の娘だった為、インフィニット・ストラトスの世界へ転生する事になった蒼太。

神様から貰った白式を駆り、蒼太は亡国企業、そして様々な次元世界を荒らす、次元犯罪者に立ち向かう！ 一夏は存在していない設

定になっています。

プロローグ(前書き)

説明が複雑です。
ごめんなさい。

プロローグ

く?????

「あれ？ここ何処だ？」

気が付くと僕は虹色の空間に浮いていた。

「確か…道路に飛び出した猫を助けようとして…」

「君は死んだんだ。」

「え？」

声が出た方を向くと、どつかのゲームに出てきそうな虹色の服を来ている男性が居た。

「まずは私の事を紹介しよう。私は全ての世界を統べる神だ。」

え？今何て言ったこの人？「つまり…神様ですか？」「そうだ。」

マジかよ！この人神かよ！！「ところで、さっき言ってた『死んだんだ』って僕は死んだって事ですか？」

「それはだね。君は猫を助ける為に飛び出した時、トラックに跳ねられて死んだんだ。」

「ええ！？」

マジかよ！僕死んだのか？「本来なら君の魂は輪廻転生し、新たな生を受ける筈だった。しかし、君が助けた猫は、実は私の娘だったんだよ。」

「む、娘…」

「あの子はかなり落ち着きが無くて…暇を見つけては君達の世界、つまり下界に猫に化けて遊びに行っていたんだ。」

私は止めたが娘は聞かなかった。本来、私達神は下界には行つては行けないんだ。下界に私達という存在が居ると起こる筈の無い出来事が発生したりするんだ。そして、今回に至った、という訳だ。」

「そ…そんな…」

自分が死んだ理由がそんな事だったとは…

呆れてもう何も言えない。「だけどね、君は娘を助けて死んだ。そ

のおかげで大事にならずに済んだ。

そこで君にはお詫びとして転生者の資格が与えられたんだ。」

「て、転生者あ？」

小説とかでよくあるあれか？

でもそうだとしたらかなり嬉しい。

「君の事は知っている。私は神だからね。転生先は『インフィニット・ストラトス』なんてどうだい？」

「インフィニット・ストラトスですか…はい！そこに行かせて下さい！」

「よし分かった。ではISが必要だな。何が良いかな？」

「白式でお願いします！」僕は即答した。白式を選んだ理由はインフィニット・ストラトスはアニメと原作を見まくり、その中で主人公、織斑一夏の白式が一番かつこ良く好きだった。それに一回ISを動かしてみたいとも思っていたからだ。

「白式か…それだと主人公である織斑一夏君が存在しなくなるけど良いかな？」「構いません！」

これも即答。一夏さんは主人公だから尊敬出来る所もあるが、いくらなんでも鈍感すぎるので一度、あの鈍感さを反省すべきだと思う。「それじゃあ原作を少し変更して、白式は作られていない設定で私を作り出した468個目のコアで出来たISで良いかい？」

「はい！」

僕が返事をする。すると左腕に白式の待機状態である白いガントレットが装着された。

「他に何か要望はあるかい？」

「じゃあ…出来ればISの訓練をして白式に慣れたいんですけど…良いですか？」「勿論だとも。私の娘の不幸際でこうなったのだから、これ位の要望は叶えてあげるさ。」

「じゃあ、よろしく願います！」

それから白式に慣れる為、訓練が始まった。

最初の内は初期設定だったので動きもぎこちなく武器も近接ブレイ

ドしかなかった。しかし途中でファーストシフトした事により、形状が変化し、機体が自分の手足のように動くようになった。武器も雪片式型になり、そこからはより実践的な訓練に入っていた。

それと平行して、ISの知識等も教え込まれたので、ISの改造等も出来るようになり、実際、白式を少し改造した。

そんな事をしている内に僕が白式を貰ってからあつという間に1年になり、その頃にはISの操縦技術と知識、それに白式が凄い事になっていた。

「まさかここまでレベルアップするとは…流石に私もびっくりしたよ…」

神様もかなり驚いていた。まあ僕もだけどね…

「ともかく、これで訓練は終了だ。これから君を転生させるが、幾つか注意すべき事があるから心して聞いてくれ。」

神様が真剣な表情になった。余程大事な事なのだろう。

「まず1つ目、本来の主人公である一夏君がいないの事と君というイレギュラーが転生する為、原作やアニメには無い出来事が起こると思う。いや、これはまず間違いなく起こるだろう。そのような出来事は君が率先して解決する事。」

「分かりました。」

「次に2つ目、君の世界のインフィニット・ストラトスの事は話さない事。もし漏洩したら世界がメチャメチャになるからね。」

「成る程。」

「3つ目、これが一番重要だ。実は君の転生の理由は2つある。1つは不手際のお詫び。しかしこれはあくまで表向きの理由だ。

本当の理由は君に次元犯罪者の殲滅をしてもらいたい。」

「次元犯罪者？」

何だそのアニメに出てきそうな単語は…

「次元犯罪者とはその名の通り、様々な次元世界に現れ、犯罪行為を繰り返しては別の次元世界に逃げ込みその世界でも犯罪行為をする。これを繰り返している輩の事だ。しかも厄介な事に奴等は様々

な次元世界を渡り歩いたせいで様々な世界の兵器が使える。

そして奴等は現在、インフィニット・ストラトスの亡国企業と手を組んでいるという情報が入った。

このままでは何かとんでもない事が起こりかねない。奴等の力は強大だ。そこで転生者となった君には亡国企業と次元犯罪者を殲滅して欲しいんだ。」

神様が言い終わると僕はしばらく考え込み、結論を出した。

「分かりました。やらせて頂きます！」

「ありがとう。最後にこれを渡しておく。」

そう言うと神様がテニスボール位の大きさの何かを取り出し、僕に渡した。

銀色で、横の表面には青い光のラインが一周するよう刻まれ、上には青い光のラインがダイヤモンドを描くように刻まれており、中央には黒い丸があった。

「神様、これは一体何なんですか？」

「それはセイントカプセル。その中にはガンダムシリーズに登場する殆どの機体のデータが記録されていると同時にそのパイロットの意思も宿っています。」

「機体のデータとパイロットの意思が…でも何でこれを？」

「それはOOのGNドライブを元にして作り上げた物。あらゆる機体と融合可能で、新たな存在へと進化させるアイテムだ。」

しかしそれをセイントカプセルの上部にあるダイヤモンドに光が灯っていない状態で融合させると融合した機体のパイロットはカプセルに宿っているパイロットの意思に取り込まれ、やがて死に至る。その原因は、パイロットの意思が融合する機体のパイロットを真のガンダムと認めてないからだ。」

ガンダムとして認めてないって…OOの刹那かよ…

「しかし、真のガンダムとして認められた者ならば、セイントカプセル上部のダイヤモンド中央にある黒い部分に光が灯り、意思に取り込まれる事は無く、融合でき、記録されている機体の力を使用出

来るようになる！そしてその機体は新たな存在へと生まれ変わるんだ！」

なんか神様の説明が熱くなっている気がする…

「そして、融合した機体はセントカプセルが進化したGNドライブが搭載されるんだ。」

「なっ！？GNドライブが！？」

流石にこれは驚いた。

GNドライブがあればドライブが破壊されない限り、半永久的にエネルギーを生み出せるからだ。

「まあ、正確にはGNドライブで有り、GNドライブで無い物だけどね。」

「どういう事ですか？」

「セントカプセルが融合してGNドライブに時なる、GNドライブに進化させる力はその機体のパイロットの『思い』なんだ。」

その思いがGNドライブへ進化させる為、従来のGNドライブとは全く異なるGNドライブが誕生するんだ。」

「全く異なるGNドライブ…それはどんな物なんですか？」

そう尋ねると、神様は黙り込んでしまった。

「神様？」

「…すまない。こればかりは私でも分からないんだ。」

神様は申し訳なさそうに答えた。 「…そうですか。」

か。それなら仕方ありません。でも神様、僕は必ず真のガンダムになつて見せます！だから神様が落ち込む必要は無いですよ。」

「ありがとう、君のような優しい人間なら大丈夫だ。じゃあそろそろ…」

神様がそう言うのと僕の先に緑色の光で出来た柱が現れた。

「準備が出来たらあの柱の中に移動してくれ。そこで私が転生させる。それと、君の荷物は用意しておいた。」

そう言うと僕の目の前に僕が使っていたリュックとカバンが現れた。一応中身を確認すると以下の物が入っていた。

- ・携帯電話
- ・携帯電話の充電器
- ・PSP
- ・PSPの充電器
- ・ガンダムのゲームソフト・ガンダムの小説等
- ・ガンダムのDVD
- ・筆記用具、ノート等
- ・着替え等の生活用品
- ・イヤホン
- ・ノートパソコン
- ・財布

私物がかなり入っていたので嬉しかったが、財布を見たときびっくりして腰が抜けた。

なんと入っていたのは札束がだったからだ。

流石に札束を財布に入れておく訳にはいかないの、小型の金庫（？）のような物を出してもらい、財布にはある程度だけ入れておいた。ちなみにその金庫、僕の指紋やらパスワードやらを入力しなければ開かない為、かなり嚴重だった。

最後にセイントカプセルをしまい、リュックを背負ってカバンを持ち、準備が完了した。

「準備が出来たようだね。」

「はい！」

神様の確認に返事をする。「あ、そうだ。君の能力だが、使い所はよく考えて使用するんだよ。」

神様がそつと言った。

「…分かってますよ。じゃあ、行ってきます！」

緑色の光の柱に向かって歩き出し、柱の中に入った。

「神の名において命ずる。新たな生を受けし者よ、今ここに転生者となり新たな世界へ舞い降りろ！」

神様がそう言つと柱が僕を包み、次の瞬間、僕はその空間から消えた。

主人公紹介（前書き）

主人公と白式についてです。

主人公紹介

名前 天空寺 蒼太

(てんくうじ そうた) 適性ランク S

好きな物 焼き肉 カツ丼 ガンダム 青空

嫌いな物 差別 イジメ

年齢 16歳

誕生日 8月6日

身長 160?

体重 48?

IS 白式

見た目 一夏のような黒い髪で、瞳はサファイアのような青い瞳をしている。

細マツチヨで、本人は気付いていないが、かなりのイケメンである。
性格 恐ろしい位のガンダムオタクで、ガンダムについて彼の右に出る者はいない為、「ガンダムエンペラー」の異名を持つ。

また、インフィニット・ストラトスについてもアニメと原作を知り尽くしている。

無限のような優しさを持つが、少しだけバカな一面がある。動物や虫、自然が好きで、特に好きなのは青空を見る事。恋愛に関しては普通。何故か悪運が異常に高く、かなりの大食い。極めて希な特異体質を幾つか持って生まれて来たが、その体質を周りから気味悪がられた為、理不尽な暴力やイジメ、差別に対してはかなり冷酷である。

両親は蒼太が小さい頃に他界しており、親戚に引き取られていた。

その時に叔父から剣を、叔母から家事全般を習っていた。

(叔父と叔母は蒼太の体質を理解している。) 幻龍と強龍という日本刀を所持している。 頭が良く、ISの改造等が

出来る。

ISの操縦技術、生身での戦闘能力もトップクラス。

特異体質

生まれた時に既に蒼太に備わっていた特殊な力。

遺伝子の変異しているのが原因らしいが、詳細は不明。

・超気功ちやうきこう生まれつき、『気』の力がとても強い体質の事。
この気により蒼太は、通常の人間の数倍の身体能力を手に入れている。

勁けい

気を練って使用する様々な術。気を球に打ち出す、武器に流し込んで威力を高める、等をして相手を攻撃する術や気を使って対象の細胞を再生させる等をして治療する術がある。 しかし、攻撃の勁は蒼太自身があまり好戦的では無い為、滅多に使わない。
尚、勁は白式を展開していても使用出来る。 ・技一覧

攻撃

打透勁だとうけい

気の球を連続で打ち出す。

旋風烈脚せんふうれつきゃく

気を足に流し込み、ローリングソバットを喰らわす。また、足の気を打ち出す事も出来る。

龍炎拳りゅうえんけん

両手を合わせ、長大な気の剣で切り裂く。

双龍斬そうりゅうざん

幻龍と強龍に気を流し込み、Xを描くように相手を切り裂く。

百歩神拳ひゃっぼしんけん

気を溜め込み、ビームのように撃ち出す。
いわゆる、かめはめ波。

治癒

ないやうこう
内養功

全身の気を放出し、傷を治す治癒の術。

使う対象が絶望的な瀕死状態でも治せるが、自分と死人は治せない。

尚、気を使う術は下に行く程、気の消費量上がり、特に内養功は全身の気を放出する為、一度使うだけで殆どの気を使ってしまう。その為、長時間や連続して内養功を使うのは自殺行為に等しい。

（気とはいわゆる体力の事。休めば回復する。）

・アニマルコンタクト

気を使って動物や虫と会話出来る能力。

また、この能力があるとあらゆる動物に好かれやすくなる。

ISについて

白式（びやくしき）

神様が作り出した468個目のコアによって稼働している蒼太の専用機。

原作の白式とそっくりだが、実際は全くの別物。

蒼太の手によって特殊な改造が施されている為、全ISの中で最強の性能を持つ。

世代 第4世代機

シールドエネルギー

1200

機体性能

攻撃 S

防御 A
機動力 S

武装

（特殊改造によってバースロットが2倍になっている。）

雪片式型・改 （ゆきひらにがた・かい）

従来の装備であった雪片式型を改造し、剣としての威力とバリアー無効化の性能を高めた雪片。見た目はあまり変わらないが、牽制用として小型のビームバルカンが追加されている。ビームバルカンの色は青色。

シールドライフル

蒼太が制作した左腕に装備されているシールド兼ビームライフル。

ビームの色がバルカン同様、青色になっている。ライフルとしてだけでなく、ビームサーベル、スタンランサーを装備している。

（ガンダムSEEDのブリッツガンダムのビームライフルの左バースジョン。）

幻龍、強龍（げんりゅう、ごうりゅう）

蒼太が使う日本刀をISが使用出来るようにした2本の日本刀。

幻龍は黄色と青色、強龍は緑色と赤色がメインカラーになっている。（色は前者が柄、後者が刀身の色を表している。）

ミサイルポッド

白式を展開した状態の時、両脚部に搭載されている四連装のミサイルポッド。

白式の中で数少ない遠距離の武器。

ワンオフアビリティ
単一仕様能力

れいらくびやくち
零落白夜

原作通り、自分のシールドエネルギーを攻撃に転化して対象のエネルギーを消滅させる。

しかし、蒼太の改造でシールドエネルギーの消費量が従来の約30%になり、より威力が増している。

第1話 舞い降りるイレギュラー

〈ナレーションSIDE〉

ここはIS学園。ISを使う操縦者を育成する学校だ。

その職員室でパソコンに向かい作業をしている女性が居た。

ISの世界大会で初代王者に輝いたブリュンヒルデこと、織斑千冬である。

「…少し休憩するか。」

千冬はパソコンの時計を見ると、ふう、と息をつき、パソコンの画面から目を離れた。

「織斑先生、コーヒーが入りましたよ。」

メガネをかけた童顔の女性が千冬の机に両手に持っていたコーヒーの1つを置いた。

千冬はその女性を知っている。その女性

は、自分が担任をしている1年1組の副担任である山田真耶だ。

「ありがとう、山田君。」

千冬は置かれたコーヒーを少し飲む。

「静かですね…」

「…そうだな。」

真耶が言った事に千冬が頷く。今はゴールデンウィーク。殆どの生徒が学園を離れている。

その為、学園にいる生徒はごく僅かな為、学園はいたって静かだった。

だがその静かさは突如破られた。

『緊急事態発生！第4アリーナに侵入者を確認！教員は速やかに急行されたし！繰り返す！教員は速やかに教員されたし！』

それを聞いた千冬達はコーヒーを一気に飲み干し、机に置いた。

「山田君、行くぞ！」

「はい！」

千冬達は第4アリーナに向けて走り出した。

〈ナレーションSIDEOUT〉

〈千冬SIDE、第4アリーナ〉

第4アリーナに到着した私と山田君はピットの映像でアリーナを確

認っていた。「山田君、拡大してくれ。」

「はい！」

山田君がキーボードを操作して映像を拡大する。

拡大された映像には侵入者がより鮮明に映し出された。

一言で言えば男だった。

歳と顔つきは高校生位で背中にはリュックを背負い、右手には旅行カバンのような物を持っていた。

「何故、男がここに……」

私は疑問に感じた事を呟いた。

今はゴールデンウィークで殆どの生徒が学園を離れている。学園に残っている生徒も僅かにいるが、その中に男はいない。

何故ならISは女にしか使えない。

その為、ISを使えない男は入学出来ない。

しかし今、男がアリーナにいる。

少し考え、私は山田君に指示を出した。

「とりあえず、教師部隊を送れ。万が一の為に武器を持っていかせる。」

「了解です。」

そう言つと私は映し出されている少年を見た。

〈千冬SIDE OUT〉

〈蒼太SIDE〉

柱に包まれ、気が付くと僕は違う場所にいた。

しかしその場所が直ぐに何処だか分かった。

IS学園だ。IS操縦者を育成する学校。そのアリーナに僕は居た。周りを見渡し、僕は本当にインフィニット・ストラトスの世界に来たんだと感じた。

しかしその時、何処からか緑色の鎧を纏った2人の女性が現れた。

その鎧を僕は知っている。IS学園の訓練機、「ラファール・リヴアイヴ」だ。

更にいつの間にか僕のか僕の左右に鎧武者のような銀灰色の訓練機、「打鉄」を纏った女性が居た。

空中にはラファール・リヴァイヴ2機が滞空しており、地上には打鉄が2機。

しかも打鉄は近接ブレード、ラファール・リヴァイヴはライフルを持っていた。(これは流石にキツいな…) 白式を使う訳にもいかず、右手に持っていたカバンを置き、両手を上げて降伏のポーズをとる。すると、向こうに抵抗の意思が無い事が伝わったのか、武器を下ろして何か通信をしていた。

すると左右に居た打鉄の1機が近付いてきて、いきなり僕の鳩尾に拳を放った。「ぐっ!?!」

その瞬間、僕の視界が真っ黒になった。

「う…ここは…?」

目が覚めた僕は辺りを見渡す。見たところ、学校の保健室のようだ。僕が寝ていたベッドの足下にはリュックとカバンがあった。

しかし、あれが無かった。「っ! 白式が無い!?!」

左腕に違和感を感じ、見ると装着していた白いガンレットが無かった。

直ぐ様探しに行こうとしたがドアが開かない。

ならば窓から、と思ったが地面との距離が恐ろしいくらいあった。

おまけに監視カメラまであったので特異体質の能力を使う訳にもいかず、断念した。仕方がなく、しばらく待つ事にした。

待つこと10分、ドアが開き、黒いスーツを着た女性が入って来た。

「気が付いたようだな。」「えっと…」

「そう警戒するな。私は織斑千冬。このIS学園で教師をやっている。お前は?」「ぼ、僕は天空寺蒼太といいます。ところで僕のISは…」

恐る恐る聞いた。

「やはりあれはお前のISか。ついてこい。」

「は、はい！」

「それと、ここでは私の事は織斑先生と呼べ。分かったな？」

「はい。」

僕は指示通り織斑先生の後についていった。

（最高機密室）

織斑先生についていき、到着したのは周りにやたらでかいコンピューターやら何やらかんやらが置いてある薄暗い部屋だった。

その一角に案内されると何かの機械に待機状態の白式が設置され、解析を受けているようだった。

その機械を操作していた女性の1人が織斑先生に気付いた。

「あ、織斑先生。」

「山田君、解析は？」

「なんとか進んでいます。ところで彼はもしや…？」山田君と呼ばれた女性が僕に気付いた。

「はじめまして、天空寺蒼太です。」

「天空寺がそのISのパイロットだそうだ。」

「そうですね、私はこの学園の教師をしている山田真耶です。」
そう言つて山田先生は僕に挨拶をした。

「それより織斑先生、このISなんですけど、とにかく凄いです
！これを見て下さい。」

山田先生がキーボードを操作すると白式のスペックデータが表示された。

それを見た織斑先生が少し反応した。

「機体名、白式。高性能万能型の第4世代機、シールドエネルギーは1200…第4世代機…世界中ではやっと第3世代機の試作品が運用され始めた筈…」

織斑先生が白式の驚異的なスペックを読み上げていく。

「この他にも、攻撃、防御、機動性、武器等も調べましたが、どれも驚異的な性能です。しかも…」

「どうした、山田君？」

「使用されているコアは…No.468とありました…」

「…そうか、天空寺。」

「は、はい！」

いきなり呼ばれ、少し声が裏返った。

「お前はさつき『僕のIS』と言ったな。つまり白式は謎のコアで稼働し、お前は男だがISが使える。そういう事だな？」

「…はい。」

そう言うのと山田先生と織斑先生は僕に聞こえない声で話始め、2分位経った時にまた向き直った。

「天空寺、ISが使えるなら分かると思うがISは女しか使えない。だがお前は使える。今の立場が分かるか？」

「…世界中から狙われる危険が高いんですよね？」

僕は答えた。それ位、インフィニット・ストラトスを読んでいれば分かる。

「そつだ。そこで提案がある。ここに入学しろ。そうすれば三年間は世界中の機関等はお前に手出し出来ん。」

「…分かりました。そうさせてもらいます。」

「どうせ入学するつもりだったから好都合だ。」

「なら話は早い。しかしタダで入学は許可できんぞ。一応ここは学校だからな。山田君、天空寺を第3アリーナに案内してくれ。」

「はい！じゃあ天空寺君、私についてきて下さい。」僕は白式を受け取ると、山田先生についていき、その場を後にした。

10分位歩くとアリーナに到着した。

「じゃあここで少し待ってて下さいね。」

そう言うつと山田先生は立ち去っていった。

待つこと15分、突然空を切る音が聞こえ、振り向くとラファールを纏った山田先生が居た。

「天空寺君、お待たせしました。」

「山田先生、これは一体…？」

「これから天空寺君には、私と模擬戦をして貰います。その内容と結果で入学を判断したいと思います。」「成る程、テストみたいな物ですか。」

「そういう事です。あ、負けたからって必ずしも不合格になる訳じゃ無いですからね。」

さつき結果って言わなかったか…？

そんな疑問を抱きつつも、ガントレットを構え、意識を集中する。

(行くぜ、白式！)

次の瞬間、全身が光に包まれ白をメインカラーにしたアーマーが展開した。

山田先生を見ると既にライフルを展開していた。

僕は武器をイメージする。すると右手に刀型の武器、雪片式型・改を展開して持ち、左手にライフル兼シールドのシールドライフルを展開した。

『ではこれより、模擬戦を始めます。』

アナウンスが流れ、僕は武器を構えた。

『それでは…始め！』

スタートの合図が響いた瞬間、山田先生が両手のライフルを連射した。

僕はそれを移動して回避するが、山田先生は僕に向かって連射を続けている。

その弾幕を掻い潜り、僕は反撃に出る。

「此方からも行きますよ！」

左手のシールドライフルからビームを放つ。

山田先生は連射を中断し、ビームを回避する。

僕は連射が止んだ瞬間、イグニッションブーストで接近し、雪片で斬りかかる。山田先生はライフルをしまい、展開した近接ブレードで受け止めた。

「まだ此方がありますよ！」

僕はシールドライフルからビームサーベルを展開し、斬りかかった。

「ライフルから剣が!?!」

山田先生は多少は驚いたが、サーベルをブレードで受けた。その瞬間、左側がから空きになった。

「そこだ!」

バリアー無効化を発動し、雪片を降り下ろす。その瞬間、ラファールの絶対防御が発動した。

「くっく!?!」

今の一撃が効いたのか、山田先生はサーベルを押し返し、距離をとった。

先生は近接ブレードを収納し、今度はスナイパーライフルのようなライフルを展開した。

「まだやられませんよ!」山田先生はライフルを二連射する。

先程より弾は少ない。しかし威力は桁違いだ。

放たれた二発は回避したが、山田先生が絶えず弾丸を放ってくる。

しかも一番反応の薄い所を狙ってきているので油断が出来ない。

(あのライフルは銃身が長いな…となると取り回しはきつい筈!)

何発目かの弾丸を避け、山田先生に向かって白式を加速させた。

「うおおおおお!」

「っ!」

ライフルから放たれる弾丸を紙一重でかわし、更に接近する。

山田先生との距離が8メートル切った時、シールドライフルのスタンランサーを二発発射した。

それと同時に左に移動して接近を続行する。

そして、先生がライフルを放った瞬間、残り1つのスタンランサーを放った。

先程の2つは山田先生の注意を向ける為の囮。

本命は今放った方だ。

囮のスタンランサーは撃ち抜かれて爆発したが、本命のスタンランサーがライフルに突き刺さった。

スタンランサーから青白い電流が流れ、ライフルが爆散する。

「きゃあつ!？」

爆風をもろに喰らった山田先生の懐に僕は飛び込んだ。

「貰ったああ！」

シールドライフルを収納し、雪片を先生に降り下ろしてそこから右斜め上に斬り上げる。

更にそこから体を一回転させ、勢いを付けた雪片で一閃した。

その瞬間、ビーツという音がアリーナに響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。模擬戦を終了します。』
それを聞いた僕は雪片を収納する。

「凄いですね、天空寺君。」

「山田先生も強かったですよ。」

「そ、それほどありません：ノノノノ」

微笑むと何故か山田先生が顔を赤くしていた。

その時、山田先生に通信が入り、それに応答する。

通信が終わると山田先生が僕に向き直り微笑んだ。

「天空寺君、テストは合格ですよ。」

「いよっしゃあ！」

思わずガッツポーズを取る。

「ただ…」

「ん？なんですか？」

「実は…今の戦いで天空寺君の实力がかなり高い事は分かったんですが…それを見ていた織斑先生が本当に実力が有るか確かめる為、

天空寺君と戦いたいと…」 「…へ？」

戦う？織斑先生が？僕と？初代ブリュンヒルデと？

「…マジですか？」

そう呟くと山田先生が苦笑いしながら頷いた。

第1話 舞い降りるイレギュラー（後書き）

感想等お待ちしています！

第2話 女神と戦士（前書き）

少し短めです。

第2話 女神と戦士

「蒼太SIDE」
テストに合格した喜びもつかの間、
僕の戦いを見ていた織斑先生が僕と戦う事になった。

あの初代ブリュンヒルデに輝いた織斑千冬さんと。

山田先生と入れ替わるように打鉄を展開した織斑先生が現れた。既に右手には近接ブレードを構えている。「待たせたな、天空寺。」

「織斑先生……」

「山田君から聞いた通り、テストは合格だ。しかしお前を見ていたら私もお前と戦いたくなつた。悪いが付き合つて貰うぞ、天空寺。」
少し無茶苦茶な理由にも聞こえるかもしれないが、僕も先生の気持ちはなんとなく分かつた。

真の強者と出会つた時に感じる胸の高鳴り。

戦士であればより強い者と戦うのは本望と言つていいかもしれない。恐らく先生は僕の戦いを見てそれを感じたのだろう。そんな事を考えていると、織斑先生が近接ブレードを構えた。

それに呼応するように右手の雪片型式・改、左腕のシールドライフルを構える。『では、試合を開始します。……始め!』

開始の合図と同時に、先生がイグニッションブーストで僕に急接近し、近接ブレードを降り下ろした。

それを雪片で受け止めるが、その威力は今までに無い位重かつた。

「ぐっ!?!」

一瞬たじろいだ僕に近接ブレードの連続攻撃が叩き込まれる。

雪片とシールドライフルで防いでいるが、それでも少しずつシールドエネルギーが削られていく。

「くっ……!」

一度先生から距離をとり、ライフルと雪片のバルカンで遠距離から攻撃を仕掛ける。

しかし、織斑先生はそれをかわしきり、突進してきた。

「これなら！」

そこへスタンランサーを全て発射する。

だが先生はすれ違い様にスタンランサーを両断し、突進を継続する。

「マジかよ！？でも…まだだ！」

ライフルからサーベルを展開し、打鉄を迎え撃つように突進する。

「やあああつ！」

雪片とサーベルによる斬撃を時間差で繰り出す。

しかしどちらにも近接ブレードで弾かれてしまい、がら空きになった僕の懐に斬撃が叩き込まれた。

「があつ！」

「ふっ！」

そこから

そこから突きが僕の胸に放たれ、白式の絶対防御が発生する。

「はあつ！」

追い打ちをかけるように先生が放った切り上げを僕はまともに喰らった。

「うわあああああつ！」

そのまま僕は地面に叩き付けられた。

「ぐっ…っ…っ…」

すぐ起き上がり、白式の状況を確認する。

シールドエネルギーの残量は301。

実体ダメージ小破。

武器は雪片とシールドライフル、共に健在だがダメージ小有り。

ミサイルポッド異常無し。武器はともかく、白式はかなりダメージを負っていた。

（これが…ブリュンヒルデの実力…！）

僕は思い知らされた。これが世界最強となった者の実力なのだ。

僕はどこか自分の力を慢心していたのかもしれない。いくら白式が高性能でも、搭乗者である僕がこんな風では意味が無い。

（ごめんな、白式。）

白式に心の中で謝る。

前方には織斑先生が地上に降りていた。

「あの攻撃を耐えきるとはな。さすがと言ったところか。」

「…織斑先生。」

「なんだ？」

「僕は、先生という強い人と戦って自分が慢心をしていた事が分かりました。」……」

織斑先生は黙って聞いている。

「先生は凄く強いです。はっきり言って勝てない可能性が高いです。でも…僕は貴女に勝ちたい！世界最強の貴女に！1人の戦士として！！」

「…そうか。なら、お前の力、見せてみる！」

そう言って近接ブレードを構え直した。

「はい！来い！幻龍、強龍！！」

そう言うと両腰に日本刀が展開し、それを抜き去る。右手に氷と雷の力を司る幻龍、左手に風と炎の力を司る強龍を構え、ミサイルポッドを収納して機動性を上げる。

「行きます！」

イグニッションブーストで急接近し、幻龍を降り下ろす。先生は近接ブレードで受け止めたが、そこに強龍を叩き込む。

「っ！！」

先生は幻龍を払い、強龍を受け止めた。

「そこだあ！」

僕は白式の右足でミドルキックを放つ。

「なっ！？」

いきなり格闘に移項した事に戸惑ったのか、強龍を払って距離をとろうとしたが、間に合わずミドルキックが炸裂する。

「ちいっ！」

「うおおおお！」

そこへ幻龍と強龍による連続攻撃を加える。

切り上げ、切り下げ、突き等を入り混ぜた斬撃を織斑先生に叩き込む。

織斑先生は近接ブレードで必死に防いでいるが全てを防ぎきれない訳でも無く、何回か攻撃が入った感触が伝わった。

「ふっ！」

先生が隙を見つけて近接ブレードを降り下ろす。

「まだっ！」

僕はバックステップで近接ブレードをかわし、隙だらけになった先生に突進した。

「これで終わりだああああー！」

幻龍と強龍に気を込めると、幻龍の刀身が青い輝きを、強龍の刀身が赤い輝きを放った。

「必殺！双龍斬ー！」

幻龍と強龍でXを描くように斬撃を放つ。

双龍斬が決まった瞬間、ブザーが鳴り響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。勝者、天空寺蒼太。』

その瞬間、僕の勝ちが決まった。

「…か、勝った？」

「そうだ。お前は私に勝ったんだ。」

振り向くといつの間にか織斑先生が居た。

「や…やった！」

世界最強の織斑先生に勝ったという事を理解すると、体から力が抜けた。

「お、おい、大丈夫か？」倒れる直前に織斑先生が受け止めてくれた。

「す…すみません。力が入らなくて…」

そう言つと白式が解除された。

「仕方がないな。よつと。」「え？うわあ！」

織斑先生がいきなり僕をお姫様抱っこした。

「先生！？一体何を！？」

「力が入らないのだろうか？私が運んでやる。」

そう言つて織斑先生は僕を運んでくれた。
ちなみに、運ばれている間は先生の体温や感触を感じて胸がドキドキしていたのは内緒だ。

その後僕は、入学までの間は先生が用意してくれた予備の教員室を使う事になり、部屋に着くとシャワーを浴びて直ぐに眠りについた。次の日からは、織斑先生にと山田先生による特別授業を受けた。しかし、その日の昼頃から何故かマスコミ等が殺到した。

仕方なく、少しインタビュアーに答えたりはしたが、それ以外の機関等は織斑先生が追い払ってくれた。

だがインタビュアーに答えた事で僕は、世界初の男性操縦者としてテレビで紹介されてしまった。

まあ、あまり僕は気にしなかつたけど。

そんな内にゴールドエンウィーク最後の日になった。

「いよいよ明日からか…」織斑先生に貰った制服を見ながら呟く。
その後、カバンからセントカプセルを取り出した。まだカプセル上部に光は灯っていない。

「今はまだでも…絶対真のガンダムになってやる！」僕は決意を口にする、セントカプセルをしまい眠りについた。

第3話 転入！IS学園！！（前書き）

今回から原作の第1巻に入りますが、まず最初に下の設定をご覧ください。

- ・現時点での1年1組のクラス代表はセシリア。
- ・鈴が既に転入している。
- ・クラス対抗戦にゴーレムが乱入していない。

以上、設定でした。

第3話 転入！IS学園！！

（蒼太SIDE、1年1組前廊下）

遂にこの日が来た。今日からIS学園での日々が始まる。制服を着た僕は、織斑先生が担任する1年1組に転入する事になった。

「では天空寺、私が呼んだら入って来い。」

「はい。」

そう言うと織斑先生は教室に入ってしまった。

それから15秒後、

「入って来い。」

先生の声が聞こえ、僕は教室に入り、教卓の横に立った。

「はじめまして、天空寺蒼太です。趣味は読書とゲームです。これからよろしくお願いします。」

自己紹介し、ペコリとお辞儀をする。

「…き」

来るな、“あれ”が。

キュピーン！という感じが頭に流れ、僕は素早く耳を塞いだ。

『きゃああああああーっ！！！！！！』

出たよ、衝撃波並の黄色い声援。

「本当に来た！史上初の男性操縦者！！」

「このクラスに来るなんて…神様、ありがとうございます！！」

「しかもテレビで見たよりカッコイイ！！」

「生きてて良かった…」 女子達が口々に黄色い声援を上げる。

「こら、静かにしろ。天空寺、お前の席はあそこだ。」

織斑先生の一言で一気に静かになり、僕は先生が指差した席に座る。

「やっぱりか…」

その席とは最前列の真ん中、つまり教卓の真ん前である。

それから先生が幾つか話をして朝のSHRが終わった。

それから授業が始まったが、あの電話帳のようなテキストを暗記し

ていたので特に困る事も無かった。

〈昼休み、食堂〉

昼になり、今は食堂で昼飯を食べている。

周りの女子が先程から見ているが、特に気にしない。「うまいな。」
今食べているのは鯖の塩焼き定食。
やはりごはんは魚の相性は良いな。

「て、天空寺君。」

「ん？」

突如前から声が聞こえ、見ると3人の女子がトレーを持ち立っていた。

「隣、良いかな？」

恐る恐る声を出すようにその中の1人が僕に聞いてきた。

「ああ、良いですよ。」

そう言うのと聞いてきた女子が安堵の溜め息を漏らした。後ろの2人は小さくガッツポーズをしている。

3人が座ると周りが少しざわついた。

とりあえず無視しとこう。「天空寺君ってそんなに食べるの？」

向かいに座った女子が聞いてきた。

今はごはん味噌汁、それに鯖が2杯目(2匹目)だ。確かに女子から見れば多いと思う。

「まあこれくらいは普通ですよ。」

「そ、そうなの？」

「その気になれば、定食3人分は食べれますよ。」

「さ、3人分!?」「それを聞いた女子が驚愕の声をあげた。
女子で一度に定食3人分を完食する人なんか普通いなからな。

その後は女子達と少し話をしながら昼飯を終えた。

〈1年1組〉

教室に戻ってきた僕は席につくと、鞆から教科書とノート、それに

筆記用具を出した。

「ちよつとよろしくて?」「はい?」

その時、いきなり声を掛けられた。その方を向くと鮮やかな金髪で青い瞳の女子、セシリア・オルコットが居た。

その雰囲気から高貴な感じがした。

「あの、何か?」「まあ!なんですよ、そのお返事は!イ

ギリスの代表候補生であり、この1年1組のクラス代表であるこの私、セシリア・オルコットに話し掛けられただけでも光栄なのでよ!?それ相応の態度というものがあるんではなくて?」

わざとらしく声をあげるセシリア。その態度に少しムツとする。

この世界、インフィニット・ストラトスにはこの人みたいな女が世の中にはゴロゴロ居る事だろう。

ISの性能は凄まじく、それを使える者は国家の軍事力になる。

更にISは女にしか使えない。だから女は偉い。

その為、ISが使えない男の立場は劇的に下がり、今や、只の労働力位にしか思われていない。

無論、男も黙ってはいない。しかし、誰も反抗出来ない。

ISに勝てないからだ。

例え、戦闘機、戦車、軍艦といった兵器もISの前では鉄屑に過ぎない。

それほどまでにISは強いが、その力を振りかざすなんてのは只の暴力だ。

「つまり、貴女はエリートと言っ事ですか?」

「そう!エリートなのですわ!」

そう言ってビシッと僕を指差す。

人を指差すのは止めた方が良いでしょう。欧米では大変失礼な事ですから。

「本来ならば私のような選ばれた人間とクラスを共に出来るだけでも奇跡なのですよ?もう少し現実を理解して頂けません事?」

「成る程、確かにミラクルですね。」 棒読み

「…馬鹿にしていますの？」

「貴女が奇跡だって言ったんでしょう？」

「ふん。まあ

でも？私は優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげます
ことよ？」

これの何処が優しさだ。

「結構です。」

「なっ！？貴方、この私が優しくしてあげると言っているのに、そ
れを断りますの！？」

「はい。」

「なっ…」

即答するとセシリアは目を見開き驚いている。

「あ、貴方という人は！！」キーンコーンカーンコーン。

何か言いかけた時にチャイムが割って入った。

「っ！またあとで来ますわ！逃げない事ね！よくって！？」

そう言つて席に戻るセシリア。

教室のドアが開き、織斑先生と山田先生が入ってきた。

「ああ、授業を始める前に諸君らに言っておく事がある。
」

織斑先生が教卓に立ち、思い出したように言った。

ちなみにその山田先生は少し横に立っている。 「この1年1

組のクラス代表はオルコットだが、学園の事情で急遽変更になった。
」

「…え？」

僕以外の女子が声をあげた。

「オルコットに代わる代表は天空寺。お前だ。」

織斑先生が僕を見ながら言った。

「…は？」

僕がクラス代表？マジで？そんな事を考
えていると、バアンツ！

いきなり机を叩くような音が響き、見るとセシリアが明らかに納得
出来ていない顔で立ち上がっていた。

「納得いきませんわ！何故代表候補生である私がクラス代表から降

るされなければなりませんの!？」

「オルコット、気持ちは分かるがこれは学園の決定事項だ。お前が掛け合つてどうにか出来るものではない。」

「だからと言つて、何故私の代わりがこのような極東の国の猿ですの!？」

……何だと？

「良いですか、実力からいけば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいという理由で変えられては困ります!大体、文化としても後進的な国で暮らさなくていけないこと自体が、私にとっては耐え難い苦痛でー」

「いい加減にしとけよ、イギリス野郎が。イギリスだって古いくらいしかお国自慢ねえじゃねえかよ。」

「なっ…!？」

キレた僕はわざと聞こえるように言った。祖国を侮辱されて黙つていられるかつてんだ。

「あつ…貴方ねえ!私の祖国を侮辱しますの!？」

セシリアは右手で僕を指差しながら言った。

その前に、いい加減、人を指差すのを止める。

僕は体から殺気を放ち、セシリアを睨み付けながらゆっくりと立ち上がった。その瞬間、クラスの殆どの女子と山田先生は殺気に怯え涙目になり、織斑先生も冷や汗を掻いていた。

セシリアも恐怖で体を震わせていたのが体から発せられる気で感じ取れた。

「てめえだつて自分の祖国を侮辱されたら怒るじゃねえかよ。それとも何か?てめえは自分がされて怒る事を、他の人間には平気でやるのか?もしそうだとしたらてめえは最低だな。」

心で思っていた事をぶちまける。するとセシリアは怒りで顔を真っ赤にし、言い放った。

「決闘ですわ!！」

机をバンツ!と叩く。

いちいち机を叩くのも止める。

「良いぜ。口で言うより分かりやすいからな。」

「言っておきますけど、あれほど私を侮辱しておいてわざと負けたりしたら、私の奴隷にしますわよ！」

「悪いが、僕は真剣勝負で手加減出来る程器用じゃなし、そんな事をするつもりもない。」

「随分自信がお有りのようですね？ですが、私は心が広いので特別にハンデをつけてもよろしいですわよ？」

「これは真剣勝負だ。ハンデなんかいらん。」

そう言うつと怯えていた筈のクラスの女子が爆笑した。「天空寺君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのなんて、大昔の事だよ？」

「天空寺君はISが使えるかもしれないけど、セシリアは代表候補生なんだよ？」「皆さんの言う通りですわ！何せ私は入試で唯一教官を倒したエリートですからね！」

女子は本気で笑いながら、セシリアは勝ち誇ったかのような風に僕に言った。

「僕は山田先生を倒しましたけど？」

「は…？」

僕がそう言うつとセシリアは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしていった。

「私だけと聞きましたか…？」

「どうせ女子だけではってオチですよ。後、僕はもう1人先生を倒しました。そして、その先生は今ここに居ます。」

そう言うつと爆笑していた女子達が静まり返る。

その目線が一点に向けられた。この教室に居る山田先生以外の先生、それは1人しかない。

「…まさか千冬姉様？」

「て、天空寺君。冗談が過ぎるよ。いくらなんでも千冬姉様に勝つなんて…」

「いや、天空寺の言っている事は事実だ。」

「ええっ!？」

織斑先生が信じきれない女子に言った。

「天空寺の言う通り、私は負けた。信じられんかもしれんが事実だ。その証拠も残っている。」

先生がそう言うとう女子達がざわめきだした。

「…嘘でしょ

?あの千冬姉様を倒した?」

「世界最強と呼ばれた…千冬姉様を…?」

「まあ、そう言う事です。もう一度言いますが、ハンデはいりません。」

今度は納得したのか、誰も笑わなかった。

「…ではハンデはお互い無しと言う事にしてあげますわ。」

「決まったようだ。では金曜日の放課後、第2アリーナで模擬戦を行う。良いな?」

「はい。」

「分かりましたわ。」

「それと天空寺。いい加減殺気を放つのは止める。」「…はい。」

織斑先生に指摘され、僕は殺気を放つのを止めた。

「では、授業に入る!」

それからは何事も無く、普通に授業が進み、あっという間に放課後になった。

（屋上）

放課後、織斑先生に屋上に呼ばれた。

「なんですか、先生?こんな所に呼び出すなんて。」「決まっているだろう。お前についてだ。先程のお前の殺気は尋常では無い。あれは一体何なんだ?」

「…分かりました、話しますよ。」

僕は先生に自分の特異体質について話した。

気の事や、特異体質によって周りから気味悪がられた事、それによっていつの間にか殺気が尋常では無い物になった事等、殆どの事を

話した。

「…代々の事は分かった。いささか信じれんが、現にお前がそんなのだから信じるしかあるまい。」

織斑先生は話を聞いても平然としていた。

「…気味悪が

らないんですか？」

「私を侮るな。少なくとも、私はお前に特異体質が有ろうが無かるうが、私の生徒の1人だと言う事に変わりはないと思っている。」

その言葉を聞いた僕は凄く嬉しかった。

いつの間にか目から涙がこぼれ落ちる。

「先生…ありがとうございます…」

「その力、使い道を誤るなよ。」

「はいっ！」

涙を拭い、僕は元気よく答えた。

「だが、1つ言っておくぞ。不用意に力を使うなよ？」

織斑先生が優しい表情からいつもの冷徹な表情に一変し、僕に言った。

その言葉を聞いた時、冷や汗が流れた。

「は、はい…」

僕はこの時、織斑先生を怒らせないようにしよう、と心に誓ったのだった…

第4話 白と青の邂逅

〔蒼太SIDE 金曜日、ピット〕

転入初日からあつという間に時間が流れ、決闘の日になった。ピットのモニターには既にISを展開しているセシリアの姿が映し出され、観客席には学年を問わず、女子が詰め掛けている。「行くか。」左腕のガントレットに意識を集中し、0、3秒後、白式が展開した。そのままカタパルトに向かい、準備が完了する。

「先生、準備完了しました。」

『了解しました。ハッチをオープンします。』

山田先生がそう言うと、前方のハッチが開いていく。ハッチが開き切り、発進しようとするのと、通信が入った。

『蒼太。』

「あれ？ 篤さん、どうかしましたか？」

あの篠ノ之博士の妹である篤さんから通信が入った。え？ なんて篤さんが居るのかって？

実は一昨日、放課後、幻龍と強龍で素振りをしていた所に偶然篤さんが通り掛かった。僕がそれに気付いて用件を問うと、篤さんは真剣を構えて『手合わせをしてくれ。』と言った。僕には断る理由も無かったのでそのまま篤さんと勝負をした。

結果は僕の勝利で終わった。でも何故か、その時名前前で呼ぶのを許してくれた。理由は『一度剣を交えれば、その者の剣から本質が分かる。お前の剣からはとても優しく、それでいて力強い感じがした。真の剣士に相応しい男だ。』との事らしい。それから篤さんが僕に挨拶をしてくれたり、話し掛けてくれるようになった。

多分友達になったんだと僕は思う。

そう言う訳で、篤さんはピットに居る。

『気を付けてな…』

「分かっていますよ。」

篤さんに応え、僕は少し屈んで発進体勢に入る。

「天空寺蒼太、白式、行きます！」

ガンダムシリーズのお決まりの台詞を言い、僕はカタパルトからアリーナに飛び出した。

（アリーナ）

「な、なんですよ、そのISは!？」

僕がアリーナに出撃するとセシリアが白式を見て驚愕していた。

「これが僕の専用機、『白式』です。」

「白式…？聞いた事の無い名前ですわね…って！貴方、専用機持ちでしたの!？」「そうですね。言ってますでしたっけ？」

「聞いてませんわよ!…まあ、良いですわ。この私の実力を示す良い機会には違いませんからね。」

『警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認。』

セシリアがそう言うのと白式から敵のIS、ブルー・ティアーズの情報が告げられた。

僕は意識を集中し、雪片式型・改とシールドライフル、ミサイルポッドを展開する。

「ではそろそろ…」

『警告！敵ISが射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。』

「お別れですわね！」

セシリアが持っていた大型ライフルから青い閃光が放たれる。

だが僕はその少し前、白式が警告を告げた時にシールドライフルからビームを放っていた。

2つの銃口から放たれたビームは互いにぶつかり、相殺され、消滅した。

「なっ!？ビームを相殺させた!？…いえ、まぐれに決まっていますわ!」

ブルー・ティアーズから4つの青い金属板のような物、ビットが射出され、ビームを放ちながら僕に向かってきた。

「さあ、踊りなさい！私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

4つのビットから放たれるビームの嵐が白式に迫る。「悪いですけど、ファンネルタイプはあっちの世界で見慣れてんですよ！」

僕は右上から放たれたビームを少し移動して回避する。今度は正面から放たれたビームを直撃コース上にあつた自分の左腕を上げて回避した。

次々と放たれるビームを僕は必要最低限の動きで回避する。

無論、時には大きく移動するのも大事だが、ファンネルタイプから放たれるビームの中で無駄に動くのは自殺行為に等しい。

頭を動かしたり、腕をあげたり、足を曲げたりという、最低限の動きでビームをかわし、僕は反撃に出る。ライフルからビームをセシリアに放った。

そのビームは回避行動によって、命中しなかったが、その時、ビットのビームが止んだ。

「そこっ！」

雪片からビームバルカンを砲撃を中止したビットの1つに放つ。

ビットにバルカンが命中し、爆発した。

「やはりか。」

ブルー・ティアーズの弱点は原作通りだった。

セシリアが命令を送らないと稼働出来ない。

そしてその制御に集中する為、セシリアはその時ビット以外の攻撃が出来ない。先程、ビットのビームが止んだのは、回避行動を取る為に集中力が乱れたからだ。おまけにあのビットは射撃のみ。ケルデムのシールドビットの防御機能や、リボーンズガンダムファイニングに搭載されているビームソード等は一切無い。

だからセシリアの集中力が途切れた時は只の金属版と同じだ。

「そらっ！」

雪片とビームサーベルで2つのビットを切り裂く。

残り1つになったビットから放たれるビームを回避し、ライフルのビームで破壊する。

「4つ！これで全部だ！」僕はブルー・ティアーズに向け、突進する。

大型ライフルのビームを回避しながら、敵機との距離を詰めていく。剣の間合いに入り、雪片を振り下そうとしたその時だった。

「かかりましたわね、ブルー・ティアーズは6機ありましてよ！」セシリアがにやりと笑った。その直後、腰のスカートアーマーの突起が外れ、僕に向いた。

そして、ミサイルタイプのビットが僕に発射された。「碎け散りなさい！」

2つのミサイルが僕に迫る。

「ワンオフアビリティー、発動。」

僕は小さく呟き、ワンオフアビリティーを発動させた。雪片式型・改の刀身が左右にスライドして白い刀身があった空間に蒼い刃が形成された。

その蒼い刃とは白式のワンオフアビリティー、『零落白夜』によって形成された光の刀身。
零落白夜を展開した雪片を

真横に一閃すると蒼い閃光が走る。

ミサイルは蒼い閃光を中心に真つ二つになり、そのまま慣性の法則に従って後ろに流れて行き、爆散した。「ミ、ミサイルが！？」

セシリアが一瞬たじろいだ。その隙を逃さず、僕は白式をブルー・ティアーズに向けた。

「ま、まだですわ！」

大型ライフルからビームが放たれ、僕に向かってくる。

「無駄だよ。」

そのビームを雪片で切り裂くように振り抜く。

零落白夜の刃に触れたビームが消滅した。

「な！？」

「喰らえ！」

両脚のミサイルポッドから8発のミサイルを放つ。その攻撃をセシリアは大型ライフルで迎撃する。

それによつて4発のミサイルが破壊され、残りの4発は回避された。その回避先に僕は飛び込んだ。

「おおおおおっ！」

一気に懐に入り、零落白夜を展開した雪片を振り下ろす。

零落白夜により、シールドバリアーが消滅し、絶対防御が発生した。

「！？絶対防御が！？」

驚愕しているセシリアにシールドライフルを突き付けた。

「はっ！？しまっー」

「フィニツシュだ。」

僕は躊躇わず、ビームとスタンランサーを零距离で放つ。装甲が無い部分にビームとスタンランサーが命中し、又もや絶対防御が発動した。

その瞬間、決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『シールドエネルギー、エンプティー。試合終了。勝者、天空寺蒼太。』

「終わったか。」

勝敗を確認した僕は、シールドライフルとミサイルポッド、雪片式型・改を収納する。観客席から黄色い声援があがっているがとりあえず適当に答え、そのままピットに戻った。

〜ピット〜

「ふう、終わった。」

白式を解除し、一息付く。「天空寺君、凄かったですよ！」

「流石は私が認めた男だ！」

山田先生と篤さんが僕にお褒め(?)の言葉をくれた。「どうも」僕は簡単に答える。はっきり言ってもう寝たいです。そのまま僕は着替えて部屋に戻ろうとしたが、そうは問屋が下ろさなかつた。

道中で女子達に取り囲まれ、質問やら取材やらの嵐を受け、自室に

辿り着いたのは試合が終了して2時間後だった…

〈蒼太SIDE OUT〉

〈ナレーションSIDE、上空〉

蒼太とセシリアの模擬戦が行われていた第2アリーナを見下ろすように、“それ”は佇んでいた。

黒い装甲のISを纏っている男。髪の毛は茶髪で、瞳は蒼太とは対照的に真っ赤なルビーのような色だ。

「…ああ、分かっている。これより帰還する。」

男は通信を切り、先程の蒼太とセシリアの模擬戦を記録したデータを見た。

それには蒼太が重点的に記録されており、男は映し出された蒼太を睨み付けた。「天空寺蒼太：俺は貴様を認めない…！」

怒りに満ちた声をあげる男。黒い装甲のISを纏っているその手には金色で、赤い光のラインが刻まれたのテニスボール位の大きさの物体が握られていた。

第4話 白と青の邂逅（後書き）

オリキャラを登場させてみました。
感想等お待ちしています。

第5話 鈴との戦い！そして新たなる来訪者（前書き）

遅くなりました。

今回は急展開です。

第5話 鈴との戦い！そして新たなる来訪者

〔蒼太SIDE、蒼太自室〕

「つ、疲れた…」

女子達の包囲網から解放され、僕は自室である1036号室に戻り、ベッドに体を投げ出した。

「まさか質問攻めに会うとは…まあ試合に勝ったけど」

その時、盛大に腹の虫が鳴った。

「腹減った…そう言えばまだ飯食ってねえな…」

食堂に行こうと体を起こし、ドアを開ける。

「わっ!?!」

「え!?!」

ドアを開けると何故か篝さんが居て、鉢合わせになった。

「ほ、篝さん…?どうしたんですか?」

「え!?!いや、その…蒼太がまだ夕食を取っていないと思ってだな。もし良ければ一緒にと…」

もしかして篝さんは僕の事を見ていたのか?

「別に良いですけど…」

「そ、そうか!なら行くでしょう…//」

そう言っただけで何故か僕の手を握った。

(なんで手を繋ぐんだ?)

そのまま篝さんと手を繋いだまま食堂に向かったが、廊下や食堂で女子達に騒がれたの言うまでも無い…

〔食堂〕

周りのざわめきは無視して、今は篝さんと食事中。

僕は牛丼で、篝さんはざるそばだ。

「あの…蒼太、お前は何者なんだ?」

「え?」

「今日の模擬戦を見ていたが、明らかにお前の動きは普通とは違う。」

こないだの剣さばきもそうだ。お前は一体何なんだ？」
篤さんが僕に質問する。

「…剣については、小さい頃から教えて貰ってたからです。ISに
ついては…すいませんが、今はまだ教えられません」

「…そうか」
篤さんは一応納得したようだ。

「ちよつと良いかしら？」「ん？」
突然声を掛けられ、篤さんと同時にその方向を振り向く。

声が出た方には、原作の主人公、一夏のセカンド幼馴染み、凰鈴音
が立っていた。

「凰鈴音…」
「知ってるんですか？」

本当は知っているが、神様に原作の事を話してはいけない、と言わ
れたので、あえて知らないフリをする。「ああ。彼女は凰鈴音。2
組のクラス代表で中国の代表候補生だ」

「そう、私が2組のクラス代表。1組の代表はセシリアからあなた
になったのよね？天空寺蒼太」

「そうですね、何か？」「単刀直入に言うわね。私はあなたに決
闘を申し込む！」

「…は？」
僕に決闘の申込み？

「何故ですか？僕と戦う理由は無いと思いますけど？」
「私には有るの！代表候補生でも無いアンタはセシリアを倒した。

つまり、アンタはセシリアより強いって事でしょ？」
「…つまり、セシリアさんを倒した僕の実力を確かめたいと？」

「分かってるなら話は早いわ。で、決闘は受けるの！？」
若干無茶苦茶な気もするが、とりあえず返事を返す事にした。

「別に良いですよ。日時はどうしますか？」
「受けるのね！時間は明日の午後2時、場所は第3アリーナよ。逃
げないでよね！」

そう言うと鈴は立ち去っていった。

「蒼太、大丈夫なのか？お前は知らないと思うが、4月のクラス対抗戦で鈴はセシリアと引き分けているんだぞ？」

篤さんが心配そうに尋ねる。対抗戦は引き分けだったのか。

「まあ、なんとかありますよ」

「なんとかって…」

僕の返事に篤さんは若干呆れていた。

（蒼太自室）

「ああは言ったけど、少しは対策をしなきゃいけないな」

篤さんと別れ、部屋に戻った僕はパソコンを開き、白式の調整を始めた。

「龍砲の対策としてとりあえず機動性を上げて、射撃武器の威力も少し上げるか」

キーボードを操作して白式を調整する。

その後、10時まで白式の調整を続行した。

（翌日、第3アリーナ、ピット）

…1つ言いたい。

「何処の世界も女子のネットワークは凄まじいな…」 決闘の約束は昨日の夜だった筈。

それにも関わらず、アリーナの観客席はほぼ満席。

その中にはセシリアさんも居た事がモニターで確認出来た。

「女子のネットワーク…恐るべし…」

「何をぶつぶつ言っているんだ、蒼太？早く準備した方が良いぞ。」

「分かってますよ」

篤さんに促され、僕は白式を展開する。

「頑張れよ」

「了解です」

篤さんに軽く答え、僕はアリーナに飛翔した。

「天空寺蒼太、白式、行きます！」

（アリーナ）

アリーナに飛び出すと、IS、『甲龍』を展開した鈴の姿が目に入る。

僕は雪片式型・改、シールドライフル、ミサイルポッドを展開し、構える。

「逃げずに来たのね」

「当たり前ですよ」

「じゃあ、セシリアを倒した実力……確かめさせて貰うわよっ！！」
そう言っていると鈴さんが青竜刀を振りかざし、突っ込んで来た。

「せやあああっ！」

振り下ろされた青竜刀をかわし、ライフルを放つが、かわされた。

「初撃をかわすなんてやるじゃない」

「…どうも」

「でも、まだまだ序の口なんだからね！」

イグニッションブーストで接近した鈴が両手の青竜刀で連続攻撃を放って来た。それを回避と防御で対処する。

「くっ！これなら！」

甲龍の球体状のパーツがスライドし、砲口が現れる。その武装は知っていた。

『衝撃砲』。

空間に圧力を掛けて砲身を形成し、その時に生じた余剰エネルギーを砲弾として撃ち出す武装。

砲身も砲弾も見えないのがこの武装の厄介な所だ。

だがハイパーセンサーが空間の歪みを感知したので、僕は迷わずブースターを全開にして回避行動に入った。

その為、放たれた砲弾は先程、僕が居た空間を通り抜けていった。

「嘘！？」

龍砲がかわされた事に驚愕する鈴。

そこへ僕は両脚のミサイルポッドからミサイルを放った。

鈴は咄嗟に青竜刀を盾にしたが、ミサイルは全て命中した。

「くっつ！？」

更に追撃の為に僕は甲龍に突撃した。

零落白夜を発動した雪片を甲龍に振り下ろす。

だが、切っ先が甲龍に触れる直前だった。

突如、凄まじい轟音が響き、僕は攻撃を中断した。

「え！？」

「な、なんだ！？」

地面から巨大な土煙が上がっている。

その土煙が晴れた中から現れたものを見て、僕は驚愕した。

「な、なんで…！」

そこに居たのは3つの機体。

色は鈍色、薄緑、青緑。

それを僕は知っている。

鈍色はガラッゾ。

薄緑はガデッサ。

青緑はガッデス。

「なんでガデッサ達が居るんだよ！？」

僕は思わず、声をあげる。するとガデッサ達は背部からGN粒子を

散布しながら空中に舞い上がる。

そのGN粒子を見て、またもや僕は驚愕する。

粒子の色が“赤い”。

赤いGN粒子を散布する疑似太陽炉。その赤いGN粒子は圧縮する

と毒性が生まれる。

それを改良し、毒性を無くしたのが、オレンジ色のGN粒子を散布

する改良型の疑似太陽炉。

アニメのガデッサ達にはその太陽炉が積まれている。しかし、目の

前に居るガデッサ達のGN粒子はどう見ても“赤”。

つまり、目の前のガデッサ達の粒子ビーム等には毒性があると言う

事だ。

そんな事を考えていると、ガデッサが手に持っていた、GNメガランチャーを僕に向けた。

数秒後、その砲口から極太の赤い粒子ビームが放たれた。

「うわっ!?!」

それを横に移動してかわすが、そこへガラッゾが両手の指からだし たGNビームクローで、ガッデスが実体剣のGNヒートサーベルを右手に持ち、襲い掛かって来た。

ビームクローを雪片式型・改で、ヒートサーベルをシールドライフルで受け止めるが、2機の出力と、突進の勢いに負け、吹っ飛ばされた。

「くっ!?!」

なんとかウイングスラスターを使って、体勢を立て直す。

だが、そこへガラッゾが放った粒子ビームの散弾、GNバルカンが撃ち込まれ、更にガッデスから金属の牙、GNファンクが放たれた。バルカンをシールドライフルで防ぎ、鋭角的に動くファンクをかわして、雪片のバルカンとライフルのビームで反撃する。

ファンクを2つ破壊したが、今度はメガランチャーの砲撃が迫ってくる。

「うおわっ!?!あぶねえ!?!」PICとスラスターの出力をカットし、それによって白式が落下を始める。それを利用してギリギリ砲撃をかわした。

PICとスラスターの出力を戻し、ガデッサ達を見る。

(そもそもなんでガデッサ達が居るんだ? GN粒子の色も違うし... それにあの精密な機械のような連携... ん? 待てよ、精密な機械?)

「ちよつと!?!大丈夫!?!」

考えていると、いつの間にか鈴が白式の近くに移動していた。

「.....」

「な、何よジロジロ見て...」

(なんでガデッサ達は鈴さんに何もしなかったんだ?)

鈴さんを見ながら、僕は思う。

すると、僕達に通信が入った。

『天空寺、鳳、無事か？』「織斑先生！」

『篠ノ之から話は聞いた。直ぐにピットに戻れ。』

それは織斑先生からの通信だった。

「え、でも……」

僕は素直に先生の指示に従えなかった。

ガデッサ達は太陽炉で稼働している。

武器の威力等もISとは比べ物にならない。

おまけに敵の粒子ビームには毒性がある。

いくら先生達でもかなりの無茶があった。

『良いから早く戻れ！直ぐに部隊を』お、織斑先生！『こんな時に

何だ！？……………何だと！？』

途中で山田先生が割り込む。織斑先生は山田先生の話の聞くと驚愕

した。

「何かあったんですか？」鈴さんが尋ねる。

『…よく聞け。アリーナの遮断シールドがレベル4に設定され、全

ての扉がロックされている』

「…ええ！？」

それには鈴さんだけでなく、僕も驚いた。

いくらガデッサ達にもそんな機能は無い。

もしかしたらまだ何か居るのか、と思った僕はガデッサ達が侵入し

て来た部分を見た。

センサーを最大にし、侵入して来た付近のデータを見る。

すると、破壊されたシールドの向こう、上空に“黒い何か”が見え

た。

（あれは…！？）

これにより、僕の中に1つの結論が生まれた。

アリーナを遮断しているのは上空の“黒い何か”。

つまり、アリーナから出るには“黒い何か”を止める必要がある。

そして、それには目の前のガデッサ達を倒さなければいけない。
そうなれば答えは1つ。

雪片とライフルを構えた。「ちよっ！天空寺、アンタ何するつもり
!？」

「あいつらを倒します」「何言ってるのよ!? 3機を相手にして
無事で済むわけ無いでしょ!？」

「嫌なら逃げても良いんですよ。僕は1人でも闘いますから」

「なっ、なんですってえ!? 逃げる訳無いじゃない、このあたしが
!」

そう言つと鈴さんも武器を構えた。

ガデッサ達も呼応するように構える。

「行くぞ!」

「見てなさい! あたしの実力見せてあげるわ!」

ガデッサとガツデスが突つ込んで来る。

それを迎え撃つように僕と鈴さんも敵に突つ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932x/>

IS インフィニット・ストラトス蒼き翼の勇者

2011年10月28日11時15分発行